竹取物語に読む火浣布の世界史

The World History of Asbestos Described in Taketori-Monogatari

現代日本社会学部　建　部　久美子

序

アスベストで作った布は、紀元前からエジプトやギリシャで、稀少な存在として王侯貴族あるいは神殿で用いられた。この燃えない布や芯はアスベストで作られたものである。燃えない布は、中国では火浣布といわれた。

アスベストは、その毒性が強く、厚生労働省が発表したアスベストによる疾病の認定基準[*1]には、石綿肺、胸膜、腹膜、心膜または精巣鞘膜の中皮腫、肺がん、良性石綿胸水、びまん性胸膜肥厚があげられている。アスベストによる肺がん、中皮腫等の発症は、単にその作業に従事した労働者のみならず、その作業着を洗濯した家族、アスベストを使用した工場周辺の一般住民、さらに阪神淡路大震災時の瓦礫処理に携わった労働者に及んでいる[*2]。アスベストは、安価で優れた材料として耐火性、断熱性、防音性にすぐれ、建材資料やそれ以外に石油ストーブの芯、耐火カーテン、耐火ブランケット、理科実験用に使用するアスベスト金網等、幅ひろく使用されてきた。このように現在深くわれわれの日常生活に使用されたアスベストに対し、どのように国民の健康被害を守るかが大きな社会的問題となっている。

本論では、わが国の竹取物語に出てくる架空の火鼠の皮衣を通して、古代に

存在した中国の火浣布あるいはギリシア・ローマの燃えない布の歴史的流れをおさえる。そして、かぐや姫をめぐりその美と愛を得ようとする時の権力者の公達たちの行為は、時を経て、高度経済成長の時代にひたすら富と繁栄を得ようとした国家的行為と重なることを述べる。現在、われわれはアスベストに起因し、すべての国民が対象となる健康障害という公害としての社会的課題に直面している。本論では、この観点から竹取物語の火鼠の皮衣を深く捉え、その物語の中に未来を指し占めす羅針盤を見いだそうとするものである。

文中、引用文献の用語、使用漢字の違い等により引用文献のままにアスベスト、石綿、比禰須美、火鼠、火ねずみ、皮衣、裘、かわごろも、阿倍の御主人、阿部のみうし、王慶、王卿、わうけい、國司、こくし等を使用する。

Ⅰ　中国に見る火鼠の皮衣の源流

竹取物語に出る火鼠の皮衣の思想の源流は、中国からの多くの文化の移入とともに伝えられたと考えられる。わが国の和名類聚抄に「火鼠」が記されている。同書の巻第七に羽族部第十五、毛群部第十六、牛馬部第十七があり、その毛群部第十六の獣名百二、獣體百三の中に火鼠は、以下のとおり記載されている[*3]。

神異記云一和名比祢須美、取其毛織為布若汗以火焼之更令清潔矣

また、鼠に関しては、和名類聚抄の火鼠の項の前に記され、以下のとおりである[*4]。

四声字苑云一和名祢須美、穴居小獣種類多者也

同書の説明をみると、火鼠はその毛を織って布にしたものは焼いて汚れを落とすと更に清潔になると記されている。その説明文に、火鼠自体の生態学的な説明はない。一方、鼠は、穴に居る小さな獣であり、種類が多いという説明であり、穴の中に生息し、その大きさについても小さいものであると現実的かつ生態学的な説明をしている。このことから推測されるように火鼠の説明は、そのもの自体の生態学的な説明ではなく、その毛を織って作った焼けない布の説明であることから火鼠の生態学的な事実を確認することはできない。

中国の石綿の歴史は、『列子』に紀元前 976 年[*5]「周穆王大征西戎・西戎獣

錕鋙之剣・火浣之布」と記述がある[*6]。同時代の火浣布の歴史については、三浦が詳しく論じている。周の穆王[*7]が大軍を率いて西戎の国を征伐したとき、西戎が降伏のしるしとして錕鋙という土地で作られた名剣と火浣布を献上した。火浣布は火で洗う布を意味し、これを洗うには布を火中にいれると火の色になり、汚れはすっかり取れてもとの布の色になる。これを火から取り出して一振りすると、まっ白で、雪かとみえるばかりになる[*8]という記述がある。また、燕の昭王２年に、王は、海人が持ってきた龍の脂を火浣布の心で灯もし、その燈火に興じたという記録がある。この龍の脂といわれるのはアザラシか鯨の脂で、石綿の灯心を使用して火を点じた。ニーダム（J.Needham）は燕には２人の昭王が存在し、時代は紀元前598年か、紀元前308年頃のことになると記述している[*9]。さらに、東漢桓帝時代に将軍の梁冀（159年没）は、宝衣として不燃性の長衣をもち、宴会でよく火の中に投じたという話も残っている[*10][*11]。

『抱朴子』の著者として知られた葛洪は300年頃、間違ってはいたが、火浣布について次の３つの説を説えた[*12]。第一の布は、海中に燃えている肅邱という山があり、この島にある種の木があり、その木は少しこげて黒色となるだけで燃えることがない。薪のように燃料にしても、灰にならない。料理を終えたら水をかけて火を消し、何度でも使用できる。この木の花を集めて布に織る。第二の布は、この木の皮を剥ぎ、灰と煮てから布を織る。この布は、花を織ったものより質は良くない。第三の布は、毛が三寸ばかりの白鼠が上空の木に住んでいる。この毛は火中で焼けない。集めて布を織る。火浣布はこのように三種類あったと記述している。第三の布は、『竹取物語』でかぐや姫が右大臣阿倍のみうしに求める火鼠の裘（皮衣）である。

中国の石綿に関する記述は、マルコ・ポーロ（Marco Polo,1254 ～ 1324）が著わした東方見聞録[*13]にも見ることが出来る。マルコ・ポーロは、中央アジアを経て1275年に元の大都（北京）に着き、元の初代皇帝フビライに仕えた。マルコ・ポーロは、中国各地を旅行し1292年に海路帰国の途につき1295年にベネチアに帰国した。その後、1298年にベネチアとジェノヴァの海軍がクルツオラ沖で海戦が起こりベネチアが敗北した。マルコ・ポーロは軍艦を一

隻、参加させていたため捕虜となり、その獄中で口述したのが「東方見聞録」である*[14]。このことについて三浦は以下のように詳しく述べている。

「チンギスタラス地方の北端には良質の鋼とオンダニク*[15]の鉱山がある。同じ山中にはサラマンダー*[16]（火蛇、石綿のこと）の鉱脈がある。」サラマンダーとは、我々の国で伝えられているような獣類ではない。すべての動物は地水火風の四元素でできているから、火の中では生きていられない。マルコ・ポーロの知人にズルフィカルというトルコ人がいたが、なかなか物識りだった。彼は次のように述べた。自分は大ハーンの命令で三年間この地方にとどまり、サラマンダーを掘った。坑道を掘って鉱脈を見つけ、鉱石を取ってくだくと、羊毛のより糸のように分かれ、これを乾燥させる。乾いたより糸を銅の大臼でつき、洗う。泥がとれ、より糸のようなものだけ残る。これを織ってナプキンにする。初めはそれほど白くないが、火中に投ずると雪のように白くなる。また汚くなったら火の中に投じて白くする。大ハーンがキリストの肖像を包むようにといって、法王に送ったこの織物のナプキンがローマにあることを付け加えておこう*[17]。

2010年現在、中国の石綿の産量は、ロシアについで世界第2位であり*[18]、2000年は、ロシア、カナダに次いで世界第3位であった。中国の石綿鉱産地で、温石綿の鉱産地は45ヵ所、青石綿は11ヵ所である。温石綿の埋蔵量は石綿総埋蔵量の99.9％を占め、青石綿は0.1％である。中国の温石綿の45ヵ所の埋蔵地で、大型鉱床が6ヵ所、中型鉱床が7ヵ所、他は小型鉱床である。全国の温石綿の埋蔵量に占める割合は、青海64％、四川18.3％、陝西11.4％、新疆3％、雲南1.75％である。また、青石綿の埋蔵地は、雲南省、河南省、陝西省、四川省の4つの省であり、そのうち雲南省は、中国の青石綿の総量の85.33％を占める*[19]。

Ⅱ　ギリシャ・ローマにみるアスベストの歴史

ギリシャ・ローマ時代おけるアスベストについては、三浦の著書に詳しい。同書によると、ギリシャの地理学者のストラボン（Strabo,B.C.ca63-B.C.ca19）*[20]は、耐火性のナプキンについて語ったというから、1世紀前後に石綿製のナプキンが

あったことになる[*21]。アスベストの採掘現場で働く労働者や石綿繊維を織る労働者の間に肺疾患があったという説もあるが、三浦ははっきりしないと述べている[*22]。ニーダムは、石綿についてギリシャ人もローマ人も最初の頃は正確な知識を記録していたが、ヘレニズム的な発想でアスベストは植物性の起原のものと考えるようになり、それがルネサンスまで続いた。この時代までは中国人がヨーロッパ人よりはるかに科学的にすすんでいたと書いている[*23]。石綿が植物ではなく鉱物だという確認は、中国ではヨーロッパより早く、ニーダムは、引用できる最古のテキストは漢代の敦憲のものとされる『洞冥記』で、年代は5世紀か6世紀の可能性が大きい。同書物では、石綿は石麻および石脈と呼ばれて石だとしている。また、2000年程前、中国は石綿で布を織り始め、石綿を石絨あるいは石麻と読んだ[*24]。

現在使用されているアスベストの用語は、ギリシャ語で単に消す事の出来ないことを意味し、おそらく、ランプの芯に使用されていた事に由来するのであろうとも記述している[*25]。フィンランドでは、紀元前2500年頃の陶器に石綿が含まれていたというが、石綿が各種の条件に強いことを知っていたのかもしれないと三浦は著している[*26]。

Ⅲ　わが国における火浣布の始まり

わが国では平賀源内により火浣布が織られた。源内は、宝歴14年（1764）3月に『火浣布説』を著し、簡単な火浣布の説明書を公にしている[*27]。源内は、火浣布で香を燃す隔火（香敷）を織った。これを官儒の青木文蔵の世話で数人の紅毛人に見せたが、紅毛国にもなく、トルコラントという国で製造され、古くははだ着などにもなる程のものを織っていたが、その国が乱世続きで織る方法が失われて今は産出していないと著している[*28]。

また、源内は、明和元年（1764）11月に『火浣布略説』を著した[*29]。同著で源内は、以下のことを述べている。ニーダムは『中国の科学と文明』で後漢の将軍が火浣布の長衣をもっていたことについて著していたこと、そして、後漢の桓帝の時、大将軍梁冀は火浣布で単衣を作った。宴会で将軍はいつわって酒を争い、杯を落として単衣を汚した。いつわり怒って衣を脱いでこれを火で

焼いた。布は火の中で灰のようになった。汚れが燃えて火が消えるとまっ白になり、灰汁で洗濯したようになった。このことは後漢書の傅子記（ふいき）略等にでている。唐土では織ることを知らず、西域よりまれに渡ってくるだけで、唐人も火浣布のことはよく知らないと書いてある[*30]。源内の『火浣布略説』では、唐土では織ることを知らずとあるが、銭論文では、2000 年程前中国では石綿で布を織り始めたと記している。中国の古書によると（中略）織った石綿は火浣布と呼ばれていたと記述されている[*31]が、銭論文では、古書の出典がないため詳細は不明である。

Ⅳ　竹取物語にみる火鼠の皮衣

前述したように、『列子』に紀元前 976 年[*32]「周穆王大征西戎・西戎獻錕鋙之剣・火浣之布」と火浣布が記載されているが、わが国において竹取物語が著された時代においては、火浣布はおとに聞くものであった。

かぐや姫は五人の公達にそれぞれ難題を出している。その 3 番目に火鼠の皮衣が求められている。 明治 29 年に出版された井上頼文『竹取物語講義全』によるとひねずみのかはごろもの項は以下の通りである[*33]。

かぐや姫、『石作の皇子には、天笠に佛の御石の鉢といふものあり。』（中略）『いまひとりには、もろこしにある、火ねずみのかはごろもをたまへ。大伴の大納言には、龍のくびに五色にひかる珠あり。（後略）』といふ。
翁『かたきことどもにこそあンめれ。此の國にあるものにもあらず。かくかたきことをば、いかに申さん』という。

同書の釋義で 今ひとりの右大臣、阿倍の御主人には、唐土にある、火鼠の皮衣をくだされとと云うとあり[*34]、すでに唐土にはあると考えられている。また、翁の『かたきことどもにこそあンめれ。此の國にあるものにもあらず。（後略）については、翁は、このできにくい注文を聞いて、それは、みんな、有りにくい品物ぢやと思はれる。此の日本國の内に有るものでもない。かやうに、出來にくい難題をば、どうして五人のかたがたに言う事ができやうか、氣の毒で言われはせぬ[*35]。とあり、竹取を生業とする翁にとって、日本の国には有得ない品物であると言わせしめている。

同書の「火鼠の皮ごろも」の項では以下のように述べている[*36]。

右大臣、阿倍のみうしは、たからゆたかに、いへひろき人にをはしける。うのとしわたりけるもろこし船の、わうけいといふものゝもとに、文をかきて、『火鼠のかはごろもといふなるもの、かひておこせよ』とて、つかうまつる人の中に、心たしかなるをえらびて、小野のふさもりといふ人をつけてつかはす。もていたりて、彼のうらにをるわうけいに、こがねをとらす。わうけい、文をひろげて見て、かへりごとかく。『火鼠のかはごろも、我が國になきものなり。おとには聞けども、いまだ見ぬものなり。世にあるものならば、此の國にも、もてまうできなまし。いとかたきあきなひなり。しかれども、もし天竺に、たまさかに、もて渡りなば、もし長者のあたりに、とふらひもとめんに、なきものならば、使にそへて、こがねをば、かへし奉らんといへり。』

本部分の釋義をみると[*37]、わたりたるもろこし船は、商業の爲に日本に渡り來れる、唐船なりとあり、その時代に唐土との商業の交易が盛んであったことが伺われる。また、火鼠のかはごろもについて、支那人の説は、南荒の外にある火山に、火鼠住みて、毛の長さ二尺ばかりあり。これを取りて、布に織れるものを火浣布と云ふ。火浣布は、垢づき汚れたる時、火中に投ずれば、焼けずして、かへりて鮮白となるものと云ひ傳へたりとある。

架空の動物である火鼠および白鼠については、上記の井上文献の毛の長さ二尺であったり、葛洪の文献の白鼠の毛の長さ三寸と記載され、多様な想定がなされた動物である。わうけいが言う「おとには聞けども」および「此の國にも、もてまうできなまし」について釈義では、「世の風説には聞き居れどの意」であり、世にあるものであれば、「此の日本國へも持ちて渡り來ませう」といふ意と述べている。

同文の譯解をみると、右大臣安倍のみうしに奉公する小野の房守が右大臣の手紙を持ち筑前の國へ行き、博多の浦に居る王卿に、皮ごろもの價の金子をわたす。王卿は此の手紙を開いて見て、返事を書く。其の文面は、「火鼠の皮ごろもは、私が住む唐土の國に無いものでござる。かねて火鼠の皮ごろもと申す事は、世間の風評には聞いて居ますれど、まだ見ました事の無い物でござる。さりながら、もしも此の世界にある物ならば、此の日本國へ、持ち渡ッて來ま

せう。」と述べており、交易の世界では火鼠の皮衣の存在は知られていると解釈できる。

このことは、盛んな交易の中で、唐土にあるならば日本にも交易品として持ち渡っているでしょうが、商人としてさかんに交易をおこなっている王卿はまだ見たことほど稀有なものであるという事が伺われる。

歴史的に、石綿は中国に紀元前から存在するが、交易品として日本に流通していないと推測される。おうけいに「いとかたきあきなひなり」と言わさしめ、むづかしい商法であり、同文の譯解では「これは實にきついありにくい商いでござる。」と「きつい」さらに「ありにくい」と二重にそれを得る困難さを右大臣安倍のみうしに示している。

しかし、火鼠の皮衣の存在を、もし天竺に、たまさかに、もて渡りなばとおうけいに言わさしめ、もしまれに天竺の方に持ちて渡りたる事あらばと、稀少な品物の交易を遠く天竺に可能性を置いているのは竹取物語の筆者の知見の広さであろうと考える。

本文の譯解をみると[*38]、右大臣阿倍の御主人と云う人は、金持で、その上一族の多い人で御ありなされた。其の年筑前の國、博多の浦へ商業のために、唐土から渡ッた唐船の乗り込み商人に、王卿と云う唐人があッた。その王卿の許へ手紙を書いて、火鼠の皮ごろもと云う物を、買うておこせよと云うた。とある。この「火鼠の皮ごろもと云う物を」について、南波[*39]は「火鼠のかわといふなる物、買いておこせよ」を「火鼠の皮とやらいふ物を買って送ってくれ」とし、「なる」は傳聞の助動詞と注に述べている。このことから右大臣安倍のみうしは、日本ではまだ存在がないが、そのような物があるらしいという伝え聞いた形で火鼠の皮衣の存在を否定していないことが推し量られる。

井上の譯解をみると、「志かしながら、もしも唐土から天竺に、稀に、持ち渡ッた事があッたならば、もしや長者の許を、訪い尋ねたなら持ツて居るかも知れぬ。長者の許を聞き合わせても、いよいよ無い物ならば（後略）」という記述の中で、もしも、もしやという表現を重ね、王卿は唐土にない物でも天竺にある可能性を示し、当時の交易の広さと火鼠の皮衣の存在をその言葉から想定することができる。

2000 年現在のインドにおける石綿の産出量 2.1 万トンは、中国の 31,46 万トンにに比べると格段にその産出量は少ない*[40]。また、インドで石綿の布が珍重された記録も筆者はまだ探し得ていない。竹取物語の作者は、わが国における文化の源流として唐土および天竺の存在を常に認識していたことが推測される。古代エジプトでは、紀元前 3000 年頃に王の遺体をアスベストで織った布で包み、ミイラを作り、紀元前 4 世紀頃にはギリシャ・アテネの神殿でランプの芯に利用され、ローマにおいても同様にランプの芯や火葬用の布に使われていたことが明かにされている*[41]。古代エジプト、ギリシャ・ローマ時代は、すでにアスベストの存在があり、時の為政者の埋葬および神殿における使用が明かにされていることから、文化の伝播によりインドにおいて最高位の僧侶に稀有な火鼠の皮衣つまり燃えない布がわたった可能性を示唆しているとも考えられる。この石綿の古代からの歴史的流れを竹取物語の作者が想定し、唐土にないものは天竺に存在するかもしれないと燃えない皮ごろもの存在を王卿の言葉として言わさしめたことは竹取物語の文学上の世界的視野および歴史的時空の深さを示すものと筆者は考える。

井上の本文*[42]の「彼のもろこし船きけり。（中略）文を見るにいはく、『火鼠の皮ごろも、からうじて、人を出だしてもとめてたてまつる。今の世にも、むかしの世にも、この皮はたはやすくなきものなりけり。むかしかしこき天竺のひじり、此の國にもてわたりて侍りける。西の山寺にありと聞きおよびて、おはやけにまうして、からうじて、買ひとりてたてまつる。『あたひの金、すくなし』とこくし、つかひにまうしゝかば、わうけいが、物くはへてかひたり。今こがね五十両たまはるべし。（後略）」とある。同文の釋義をみると*[43]「たはやすくなきものなりけり」については、容易に無き物でござるわいの意とし、「此の國にもてわたりて侍りける。」は、「天竺より、唐土へ持ち渡りてありましたる、皮ごろも」の意としている。また、「西の山寺」は、「王卿が宅より、西の方にあたる山寺」の義としている。そして、「おはやけにまうして云々」については、「貴重の品もの故、私にいひ入れては、到底賣るまじければ、官に申し立て、官の権威をかりて、強て買ひとりたりと、ことごとしく云へるなり。」と記述している。また、「こくし、つかひにまうしゝかば」については、

「皮ごろもを買ひ取る事を、山寺にかけ合へる國司 が、云々と王卿よりの使者に申しければ」の意とし、王卿は官に願ひ出でたれば、山寺への直のかけあひは、國司よりしたるなりと説明している。

同文の釋解をみると*44、以下のとおりである。さて右大臣は、房守の持ッて来た王卿の手紙を見るにその文面に云う御約束の火鼠の皮ごろもを人を出してさがさせましてやッと買い出してあげまする。かねて世に希なる物と云う事は聞き及びンで居ましたが、今實地に當ッて見れば、今の世にも、昔の世にも、此の火鼠の皮は、容易に無い物でござるわい。然るにむかし尊い天竺の高僧が、此の唐土へ持ッて渡ッて來ましたのが、私の宅から西の山寺に有ると聞き及びまして、こりや妙ぢやと思うて、すぐさま買い出さうとしましたが、何分世にまれな寶物のことゆゑ、しょせんあいたいづくでは賣るまいと考へましたから、官へ御願い申して官の威勢を以ッてやッと買い取ッてあげまする。さて代償の儀は兼て御預り申した金を用立てましたが、これでは、代金がすくないと國司が私の使者に申したによッて、とりあげず王卿が所持の金子をたして買いました。（後略）

上記の譯解を鑑みながら、石綿で織った布の存在の有無について、当時の有識者であった作者がどのように認識していたのかについて考える。王卿が、阿倍のみうしに手紙で述べている中で、「かねて世に希なる物と云う事は聞き及びンで居ましたが」*45 とあり、前々から稀少なるものと聞いておりましたが、という内容から燃えない火鼠の皮衣の存在は極めて世に希れであるといわれて昔から容易にない、と言われているが、交易商人の王卿は決してその存在を否定していない。そして後半に世に希な火浣布が存在したと述べている。

歴史上、前述したように、石綿で織った火浣布はすでに中国にあったと記述があるが、竹取物語の作者はあくまで伝説上の動物としての火鼠の皮衣を想定していると考えられる。つまり、難題をだしたかぐや姫にとって、火鼠の皮衣は存在しないのである。

「然るにむかし尊い天竺の高僧が、此の唐土へ持ッて渡ッて來ましたのが、私の宅から西の山寺に有ると聞き及びまして、（後略）」については、前述した唐土と他国との交易の流れの中で、稀有なものが世界のどこかに存在するという

宇宙的な観点から深い豊かな文化を有する天竺という遠い国を竹取物語の作者は王卿に言わさしめている。また、火浣布に象徴されるように、日本に存在しない稀有な品々を、唐土からの交易を通して得ようとするわが国の権力者や、その者たちを相手に高い値の交易を積極的に推し進める当時の交易商人の様子が伺われる。

井上本文[*46]の「此のかはごろも入れたる箱を見れば、くさぐさのうるはしき瑠璃をいろへてつくれり。皮ごろもを見ればこんじやうの色なり。毛の末には、こがねのひかりかがやきたり。げに、たからと見え、うるはしき事くらぶへきものなし。火にやけぬことよりも、けうらなる事ならびなし。（中略）」は、皮衣を入れた外箱の美しさと皮衣自身のくらべるものがない麗しい様子をのべている。井上のこんじやうの釋義をみると[*47]、金青なり。青の濃き色をいふ。とある。このことは後述する化学的視点からも一致する。

井上の同文釈義および片桐の著[*48]にも、「皮衣を見れば、金青の色なり、毛の末には、金の光し輝きたり。（後略）」とある。堀内、秋山著[*49]には「皮衣（かわぎぬ）を見れば、金青の色なり。毛の末には黄金の光し、さゝきたり。（後略）」といずれも光る性状を著している。竹取物語の作者は、火浣布あるいは石綿を見たことはないと推定されるが、稀有な物の有り様としてその様の文学的表現が現代の科学分析の視点から一致する。

石綿の光沢について「舞い散る粉じんは太陽の光でキラキラ輝くんです。」[*50]と小さい頃に大阪泉南の石綿工場付近で遊んだ子どもが語っている。鉱物性質[*51]は、紋石石綿は色が白、薄い灰色、薄い黄色、薄青であり、光沢は糸絹の光沢である。青石綿は、色が薄い紫色である。また他の鉱物と共生している状態の石綿もあり、他鉱物として滑石、マグネサイト、角閃石、大理岩、クロム鉄鉱等、およびプラチナ、パラジウム、ニッケルなどの金属元素があげられ、前述した子どもがその当時を振り返りキラキラという表現が非常に正確な表現であると考えられる。

おわりに

竹取物語の火鼠の皮衣からみるアスベストの歴史的経過とその当時における

アスベストの存在意味を明らかにした。竹取物語が誕生した時代は、アスベストに関する人体への害は述べられていない。長く労働と健康の歴史を研究した三浦も前述したようにギリシア・ローマ時代にアスベストの採掘現場で働く労働者や石綿繊維を織る労働者の間に肺疾患があったという説もあるが、はっきりしないと記述している。東方見聞録にあるように、マルコ・ポーロの知人であるトルコ人が３年間サラマンダーの鉱脈で石綿を掘り、キリストの肖像を包むための布を織ったと記述している。この長い労働の過程においておそらく何らかの健康の影響があったと推測されるが、当時においてはその記録はないと思われる。

竹取物語に描かれた火鼠の皮衣に、人類の歴史の中で、稀有な存在としての伝説上の動物の皮衣と、古代から実存し、現在、人類に重大な健康上の被害を与えているアスベストが歴史上確かに繋がっていることをみることができる。産業優先、国家施策の中で国民の健康を省みずアスベストが有害物質と判明してもなお大量に使い続け、労働災害から公害へと進んだアスベスト禍に直面するわが国の取るべき方向性は、竹取物語の火鼠の皮衣の訓戒が羅針盤として示されていると考える。

謝辞

和名類聚抄の火鼠の検索にあたり、皇學館大学図書館司書の内田珠未氏にご助力いただいたことを深く感謝します。

註

＊１　www.mhlw.go.jp/new-info/kobetu/roudou/sekimen/izoku/dl/04.pdf
基発 0329 第２号平成 24 年３月 29 日厚生労働省労働基準局長「石綿による疾病の認定基準について」

＊２　ＮＨＫニュース８月 24 日
http://www3.nhk.or.jp/news/html/20120824/k10014498581000.html
阪神・淡路大震災の際、がれきの撤去作業をした兵庫県の男性がアスベスト特有のがんで死亡し、国から労災の認定を受けていた。

＊ 3　編集刊行古辭書叢刊刊行會、原装影印版古辭書叢刊第五回配本『和名類聚抄（十巻本)』雄松堂書店昭和 50 年 1 月日 25 日、巻第七毛群部第十六

＊ 4　前掲『和名類聚抄（十巻本)』巻第七毛群部第十六

＊ 5　銭永東、後藤恵之輔「中国のアスベスト利用状況の検討」長崎大学工学部研究報告第 37 巻第 68 号平成 19 年 1 月、67 頁

＊ 6　三浦豊彦『労働科学叢書 92 労働と健康の歴史第 7 巻ー古典的金属中毒と粉塵の健康影響の歴史ー』224 頁 232 頁小林勝人訳注『列子（下)』岩波文庫 63 － 64 頁、1987 年（昭和 62)、1992 年 3 月 25 日、労働科学研究所出版部

＊ 7　穆王は周五代目の王

＊ 8　再掲　三浦豊彦 224 頁 232 頁 小林勝人訳注『列子（下)』岩波文庫 63 － 64 頁、1987 年（昭和 62)

＊ 9　前掲　三浦豊彦 224 頁 232 頁 ジョセフ・ニーダム著　東畑精一、藪内清監修『中国の科学と文明』第 6 巻地の科学 186 - 192 頁、思索社 1976（昭和 51）年

＊ 10　前掲　三浦豊彦 224 頁

＊ 11　再掲　銭永東 67 頁

＊ 12　前掲　三浦豊彦　224 － 225 頁

＊ 13　www2u.biglobe.ne.jp/~KA-ZU/maruco_2.html

＊ 14　再掲　三浦豊彦　234 頁

＊ 15　東方見聞録 17 頁 books.google.com/books?id=fI1tqmhrGWwC,2013.10.1

＊ 16　東方見聞録 56 頁 books.google.com/books?isbn=4791614887,2013.10.1

＊ 17　再掲　三浦豊彦　234 － 235 頁 青木富太郎訳マルコ・ポーロ著『東方見聞録』49 － 50 頁社会思想社、1969（昭和 44）年、三浦はトルコラントはトルコのことであろうかと記述している。

＊ 18　USGS「Mieral Commodity Summaries（鉱物商品概要)」
www.nocs.cc/study/ind/asbestos.htm
www.city.atami.shizuoka.jp/www/contents/.../other/44bc62e6003.

pdf,2013.10.1

＊19　再掲　銭永東 68 頁、注表 -2 中国の地質鉱産部の統計資料より

＊20　kotobank.jp/word/ このサイトでは、ストラボンは前 64 か 63 ー後 23 とある。

＊21　再掲　三浦豊彦　225 頁

＊22　前掲　三浦豊彦　231 頁

＊23　前掲　三浦豊彦　225 頁

＊24　再掲　銭永東他　67 頁

＊25　再掲　三浦豊彦　225 頁

＊26　前掲　三浦豊彦　226 頁

＊27　前掲　三浦豊彦　226 頁

＊28　前掲　三浦豊彦　226 頁

＊29　前掲　三浦豊彦　226 － 228 頁、平賀源内火浣布略説『平賀源内全集、上』201 － 217 頁名著刊行会 1970（昭和 45）年

＊30　再掲　三浦豊彦　228 頁

＊31　再掲　銭永東他　67 頁

＊32　前掲　銭永東他　67 頁

＊33　講述者井上頼文『竹取物語講義　全』明治 29 年 2 月 20 日発行者辻本九兵衛 、小川寅松、印刷者橘磯吉、発賣所尚榮堂 40 － 41、44 － 45、94 － 115 頁

＊34　前掲　井上頼文 44 頁

＊35　前掲　井上頼文 釈義 45 頁

＊36　前掲　井上頼文 94 － 95 頁

＊37　前掲　井上頼文　釈義 95 頁

＊38　前掲　井上頼文　釈義 96 － 97 頁

＊39　校注　南波浩『日本古典選竹取物語・伊勢物語』昭和 35 年 7 月初版

＊40　再掲　銭永東他　68 頁

＊41　勝田悟『早わかりアスベスト』2 頁、中央経済社、平成 17 年 10 月

＊42　再掲　井上頼文　97 － 98 頁

＊43　前掲　井上頼文　99頁

＊44　前掲　井上頼文　100 － 101頁

＊45　前掲　井上頼文　100頁

＊46　前掲　井上頼文　102頁

＊47　前掲　井上頼文　103頁

＊48　校注・訳者片桐洋一・福井貞助　松村誠一『日本の古典第十巻竹取物語伊勢物語土佐日記』小学館、昭和58年2月28日　28頁

＊49　堀内秀晃・秋山虔『新日本古典文学大系17　竹取物語　伊勢物語』岩波書店1997年　28頁

＊50　編者松田穀、竹宮恵子『石の綿ーマンガで読むアスベスト問題ー』かもがわ出版2012年、152頁

＊51　再掲　銭永東他　69頁